

# 適正施設ガイドライン

【ホウシャガメ *Geochelone radiata*】

2020年9月

公益社団法人日本動物園水族館協会

## 種の概況

マダガスカル南部の平地の草原ややぶ地、岩場などの乾燥した環境に生息する。

スカレン諸島（モーリシャス、レユニオン）に人為的に分布。

主な生息地はステップ気候であるが、温暖気候、サバナ気候にも一部生息している。

### ・ 形態

甲長は最大 41cm、体重は 13～16kg。背甲はドーム状で、甲板は黒褐色に濃黄色の放射状の模様がある。腹甲は濃黄色で黒褐色の筋模様が入る。頭部は黄色で、頭頂部は黒褐色をしている。

### ・ 生態

食性は植物食で、草や花、果実、多肉植物、キノコなど様々な植物を食べる。

甲長 26～28cm で性成熟する。オスは甲長 31cm に達すると交尾を始める。

繁殖は、1 回に 1～9 卵を産卵し、21 日前後の間隔で 5～6 回の産卵がみられる。

## 1 飼育環境

### 1-1 飼育面積

日光浴（紫外線浴）、通常の温度帯とホットスポット、シェルター等の落ち着ける場所、プール（水飲み）を設定できる面積を確保することが最低の条件

飼育面積としては、成体 1 頭あたりで 6×2×2ft (182.88×60.96×高さ 60.96cm) 1.12 m<sup>2</sup> 以上、成体ペアで 8×3×3ft (243.84×91.44×高さ 91.44cm) 2.23 m<sup>2</sup> 以上 (\*1) の広さを確保する。複数頭飼育の場合は、頭数に応じた飼育面積を確保する。

\* 参考資料 AZA Chelonian Advisory Group Regional Collection Plan 4thEdition  
December 2015

### 1-2 温度・湿度

温度は、年間を通して 15～32℃の範囲内とし、日内・季節変化を持たせる。最低温度は 15℃を下回らないように注意する。

ホットスポットが必要で、バスキングライト等で 35℃の場所を設け、カメが自由に温度帯を選択できるようにする。

湿度設定は、冬季（乾季）で 40%、夏季（雨季）で 80%の季節変化をつける。

加湿は、飼育施設への散水等で湿度の調節をおこなう。

常時床材が湿った状態で管理していると腹甲に潰瘍等の障がいがあるため、散水量（手動、自動含め）に注意する。雨季の再現で散水量を多くする場合は保水性が低く、排水性の高い床材等を用いて乾燥状態を維持する。排水性が低い床材の場合は、数時間で蒸発する量とする。

### 1-3 照明・日照時間

屋外では直接日光浴（紫外線浴）できる環境を作ることが必要である。（カルシウム代謝を助けるためのビタミン D3 の合成には紫外線が必要になる）

屋内飼育など直接日光浴ができない施設（時期）の場合は、爬虫類専用紫外線ライト（フルスペクトルライトやメタルハライドランプ、ハロゲンランプ等）などの紫外線（UVA/UVB）を発する照明器具を使用し、日光浴と同様の環境を作る。

また、屋内飼育での日照時間については、日内・季節的変化を設ける。

### 1-4 水飲み・プール

プールの面積は、飲水と温水浴ができる様に全身が浸れるような広さにし、水深は成体の場合 5cm 程度とし、幼体については溺れない程度の水深とする。また、プールの辺縁はスロープを設け出入りしやすいようにする。

プールが設置できない場合は、水飲みを設け常時飲水可能な状態にし、体調を崩した時など

は温水浴をおこなうようにする。

#### 1-5 シェルター

シェルターや日陰（物陰）などを設け、カメが落ち着けるような場所を設ける。

入り込んだまま出てこない場合は、日光浴（紫外線浴）を促す工夫をおこなう。

#### 1-6 床（床材）

床材は赤玉土、赤土、黒土、腐葉土、バークチップ、ヤシ系土、火山礫系、山砂、海砂などを単体または混ぜて使用する。埃やカビ・ダニなどの発生等の衛生面には注意する。

また、餌と一緒に床材を誤食しないように床材の大きさや給餌時には餌皿を使用するなどの配慮が必要である。積極的に床材を食べる個体がいる場合は、直ちに食べられないようなものに変更する。

コンクリートなど硬い床材は、腹甲や爪などに影響をあたえる。また、滑りやすい床（材）も避ける。

屋内飼育には床に排水設備を付けるのが望ましい。

#### 1-7 産卵場

産卵は 15～20cm 掘り産卵するため、産卵場は 30cm 以上の深さが必要である。

#### 1-8 餌

草食動物で、牧草や野草、葉物野菜類を中心に、根菜類、果物など補助的に与える。

野生では多肉植物なども食べている。

給餌は週に 2～4 回、幼体については 3～7 回与える。

餌にはビタミン D3 を含むカルシウムとビタミン剤を添加する。

過剰な蛋白質及び動物性蛋白質は、甲板と骨格のバランスを悪くさせ、甲板の凸凹につながるため与えない。

#### 1-9 繁殖

普段はオスとメスを別々に飼育し発情する春～初夏に同居する。

（低温の乾季を経て、高温の雨季への季節性を提供した後、同居を実施する）

甲長 26～28cm で性成熟し、31cm に達すると交尾を始める（メスはオスより数センチ大きさが必要）。

産卵は 15～20 cm の深さの穴を掘り、3～12 卵産卵する。平均 5 卵前後。21 日前後の間隔で 5～6 回の産卵がみられる。

孵化日数は 80～230 日前後（平均 120 日前後）と、孵化温度等の条件によって幅がみられる。

人工孵化をおこなう場合は、容器にバーミキュライト等の床材を敷き、容器内を温度 27～33℃、湿度 60～80% に調整する。

卵のクーリングをおこなう場合は、容器内を 20℃ に下げて、20～30 日間クーリングをおこなう。クーリング後、数日間かけ徐々に孵化温度まで上げていき、人工孵化に移行する。

孵化した幼体については、容器内の湿度を高く保ち乾燥による甲羅のゆがみを防止する。